「牡丹姫（ぼたんひめ）」

昔々、屋代の一本柳に浜田大膳安利という立派なお殿様が住んでいましたが、どうしたことか、四十を過ぎる年になってもこどもが授かりません。

そこで、なんでも願いをかなえて下さるという亀岡のお文殊様に二人は出かけました。

七日七夜、一心不乱にお参りした七日目の夜更けのこと、疲れてうとうとしていると、紫の雲の中から唐獅子に乗ったお文殊様が現われ、手にもった満開の牡丹の花で二人の頭を撫でられました。

不思議なことに、奥方様も同じ夢をみておりました。

このことからまもなく、玉のような女の子が授かり、牡丹で撫でられたこどもなので、「牡丹姫」と名付けました。

牡丹姫はその名のとおり美しく聡明で、気立てが良いので、里人からたいそう慕われておりました。

そして年頃になると、二井宿と竹森の二人のお殿様が牡丹姫をお嫁に欲しいために戦いがおこりそうになったのです。

心を痛めた牡丹姫はお文殊様にお祈りし、進む道を教えていただき、二井宿のお殿様の奥方様になり、里人も牡丹姫も大変幸せになりました。

三年後、お産のための里帰りの途中、泉岡で産気づいてしまった牡丹姫は、こどもの命だけは助けて欲しいとお文殊様の方向に向かってお祈りし、息を引き取ってしまいました。

泉岡の高台の明神山に牡丹姫を祀った子易明神があります。

安産祈願の明神様として多くの人がお参りしています。

また、生まれたこどもは、安然大師という偉いお坊様になられたということです。

※原文は高畠町立図書館でご覧いただけます。